

資料

臨地実習における学生の達成感に影響する要因の分析(第3報) —4年次学生に対しての縦断調査を通して—

原田 秀子*

要約

本研究では4年次学生43名を対象として、実習での達成感に影響している要因を分析すること、そして実習を重ねることでの変化を分析することを目的として、4年次の実習終了後に質問紙調査及びインタビューを行った。

その結果達成感に特に影響すると考えられた要因は、患者との関わりと自分自身の2つの要因であった。患者との関わりにおいては、困難と感じた状況を乗り越えた経験が達成感につながっていた。そして困難を乗り越えるためには、自分自身の努力に加えて教員や看護師などの他者に支援を求めたり他者からの支援を受け入れたりすることが重要であり、その能力は実習を積み重ねることにより身についてくるものである。自分自身においては、自分自身の努力や成長が達成感につながっている。中でも状況判断の能力や問題解決能力が身についてくることにより、自立した行動がとれるようになっている。その一方で困難な状況においては教員や臨床指導者の支持的な態度や指導・助言を必要としていることがわかった。

キーワード：達成感、影響要因、経験、実習指導

I. はじめに

学生は実習において看護目標達成に向かいながら学習目標達成を目指すことを求められる。さらに臨床の現場は学生にとって予測できないことが多く、変化する状況に適応していくためにはさまざまな困難を伴うことになる。それだけに困難な状況を乗り越えることで得られた達成感や自信につながり、今後の学習意欲を引き出す。

前回までの研究(第1報²⁾、第2報³⁾では、A大学看護学部在学する3年次の学生を対象にして臨地実習での達成感と、達成感に影響する要因を分析し、実習指導の方向性を検討した。先行研究⁴⁾によると、実習における学生の達成感に影響する要因として、患者との関わり・臨床指導者との関わり・教員との関わり・グループメンバーとの関わり・既習の学習・自分自身の6つの要因を取り上げていた。実習で関わる人的要因のうち患者・臨床指導者・教員・グループメンバーは特に密接に関わりを持つため影響要因として重要な要因であると考えた。その他自分自身の努力やこれまでの学習の積み重ねも大きく影響すると思われた。そのため、第1報²⁾ではこの6つの影響要因を用いて調査を

行った。その結果、6つの影響要因のうち、患者との関わり・自分自身の2つの要因で達成感との関連が認められた。このことから、患者との良い関係をつくるためのサポートや、実習中の経験が自信につながるよう学生の頑張りを認めていくことが、達成感を高めるための教員の役割として必要であるという示唆を得た。

また第1報の結果から、6つの影響要因以外の変数による影響が大きいことが推測されたため、第2報³⁾では、影響要因にカリキュラムを加えて、3年後期の実習終了後に調査を行った。その結果、臨床指導者との関わり・既習の学習・自分自身の3つの要因で達成感との関連が認められた。3年後期の実習はクリティカルケアを必要とする対象を受け持つ実習であった。そのため、患者の状態を適切にアセスメントするためにも、ケアを安全に実施するためにも臨床指導者の指導・助言が特に必要であったこと、また、急激な状態の変化が予測される患者のアセスメントを行う上でも、ケアの方法を考える上でも既習学習の活用が必要が特に高かったこと、また、臨床指導者の指導・助言や既習学習の活用以外にも、課題達成のた

めの幅広い自己学習が特に必要であったことが上記の結果に影響したことが示唆された。

本研究では、第1報²⁾、第2報³⁾と同一の学生に対して、4年次の実習終了後に調査とインタビューを実施することにより、実習経験を重ねることでの変化を分析することを目的とする。ここでの達成感とは、実習目標を達成し成功したという感覚と定義する。

II. 研究方法

1. 研究対象

A大学看護学部の4年次生で、4年前期に行なわれた精神看護学実習・母性看護学実習・小児看護学実習を終えた学生43名(内訳：女性39名、男性4名)である。

対象学生は、3年次に成人看護学実習・(主に慢性期にある成人患者対象)・老年看護学実習・成人看護学実習Ⅱ(主にクリティカルケアを必要とする成人患者対象)・在宅看護論実習・地域保健学実習を終了している。4年次は5グループに分かれローテーションしながら精神看護学実習・母性看護学実習・小児看護学実習をそれぞれ2週間ずつ行う。実習実施時期は5月から7月までである。

2. 実習方法

精神看護学実習では、各病棟に2～3名ずつ配置され、2週間の実習を行う。母性看護学実習・小児看護学実習では、2週間の実習期間のうち1週間は病棟実習を行い、1週間は外来系での実習を行う。担当教員が臨床指導者と連絡を取り合いながら協力して指導にあたる。病棟実習では受け持ち患者を対象に、看護過程の展開を主にした実習を行う。

3. 調査方法

1) 質問紙調査

(1) 調査実施時期

調査の趣旨を説明し承諾を得た4年生43名を対象とし、実習終了後の8月上旬に無記名式の質問紙調査を行った。記入後はその日のうちに回収した。

(2) 調査内容

原田ら⁴⁾の調査内容を参考にし、実習での達成感と7つの影響要因についての調査内容を作成した。調査内容は前回の調査内容と同一である。実習での達成感については、得点化の基準を、「達成感があった(5点)」から「達成感がなかった(

1点)」までの5段階の間隔尺度で示し、回答は選択式とした。次に達成感に影響した要因については、1.患者との関わり 2.臨床指導者との関わり 3.教員との関わり 4.グループメンバーとの関わり 5.既習の学習(これまでの講義・演習・実習での学習すべてを指す) 6.自分自身(自己学習や自己の努力など) 7.カリキュラムの7項目をあげた。各々の項目について得点化の基準を、「達成感を高めた(5点)」から「達成感を低めた(1点)」までの5段階の間隔尺度で示し、回答は選択式とした。

2) インタビュー

(1) 調査実施時期

質問紙調査では汲み取れない学生の意見を抽出する目的で、アンケート調査終了後の8月上旬から下旬にかけて半構成的面接法を用いてインタビューを行った。

(2) 調査対象

4年次学生43名の内、調査の趣旨を説明しインタビューへの協力が得られた11名(うち女性10名、男性1名)に対し、1人30分程度でインタビューを行った。

(3) 調査内容

以下の2点について自由に口述してもらった。

①達成感のとらえ方。

②7つの影響要因を示し、特に影響したと思う要因を中心にして印象に残っていること。口述内容は許可をとり筆記した。

4. 分析方法

1) 質問紙調査

統計処理は統計ソフトSPSS Ver10.0Jを用いて行った。分析方法を以下に示す。

(1) 達成感の得点と達成感に影響する7要因の影響の程度を示す得点(以下影響得点とする)の平均値を求め比較検討する。

(2) 達成感の得点と達成感に影響する7要因の影響得点とを重回帰分析にて検討する。

2) インタビュー

(1) ①達成感のとらえ方、②達成感に影響した要因別に印象に残ったことの2点について、口述内容の類似性に従いカテゴリー化する。

(2) ②で抽出されたカテゴリーを構造的に図解する。

Ⅲ. 結果

1. 質問紙調査の結果

回収数35部、回収率81.4%であった。有効回答数31部、有効回答率88.6%であった。

1) 実習での達成感の得点と達成感に影響する7要因の影響得点 (表1)

達成感の得点の平均値は3.91であった。達成感への影響要因として、患者との関わりの影響得点の平均値が4.24で最も高く、次いで高かったのが、グループメンバーとの関わりの4.17であった。一方最も低かったのはカリキュラムであり、影響得点の平均値は3.06であった。

2) 重回帰分析による達成感の得点と7つの影響要因の得点との関係 (表2)

達成感の得点を従属変数とし、達成感に影響した7つの要因の影響得点を独立変数として重回帰分析を行った。その結果達成感との強い関連がみられたのは、患者との関わりのみであった。

2. インタビュー内容の分析結果

1) 達成感のとらえ方 (表3)

<頑張ったという気持ち><困難を乗り越えたという気持ち><満足のいくケアができたという気持ち><看護をしたいという気持ち><自分の考えの深まりを感じた>の5つのカテゴリーが抽出された。

表1 実習での達成感の得点と7つの影響得点 (n=31)

	平均値	標準偏差
達成感	3.91	0.72
患者との関わり	4.24	0.79
臨床指導者との関わり	3.61	0.75
教員との関わり	4.09	0.66
グループメンバーとの関わり	4.17	0.92
既習の学習	3.54	0.70
自分自身	3.66	0.59
カリキュラム	3.06	0.85

表2 重回帰分析による達成感の得点と7つの影響要因の得点との関係

独立変数	達成感		
	β	γ	有意確率
患者との関わり	0.562	0.547	0.005**
臨床指導者との関わり	0.082	0.121	0.564
教員との関わり	-0.035	0.049	0.814
グループメンバーとの関わり	-0.132	0.147	0.483
既習学習	0.253	0.243	0.242
自分自身	0.31	0.350	0.086
カリキュラム	-0.336	-0.397	0.050

β = 標準偏回帰係数 γ = 相関係数 **p<0.01
R=0.804 R²=0.647

2) 達成感に影響する要因

達成感に特に影響する要因として、患者との関わりと自分自身を挙げた者が11名中いずれも5名で最も多かった。次いで既習の学習は11名中2名が挙げていた。

学生の口述内容から達成感に影響した要因別に印象に残ったことを抽出し、類似する内容をまとめてカテゴリー化した結果、達成感にプラスに影響しているカテゴリーが大部分を占めていたが、それ以外のカテゴリーも抽出された。抽出された各カテゴリーとそれぞれのカテゴリーに含まれる主な回答を表4に示した。

患者との関わりについては、<コミュニケーションがとれた><困難があったが乗り越えられた><関わり方がわからなかった>の3カテゴリーが抽出された。

臨床指導者との関わりについては、<支持的な態度><指導・助言><指導者からの助言を前向きに受け止める><関わりがもてなかった>の4カテゴリーが抽出された。

教員との関わりについては、<支持的な態度><指導・助言><自立してきた><教員による差>の4カテゴリーが抽出された。

グループメンバーとの関わりについては、<情報交換ができた><励まし合えた・助け合えた><ストレス発散ができた>の3カテゴリーが抽出された。

既習の学習については、<実習中に必要性を感じて学習したことが役立った><これまでの経験が役立った><役立ったという実感がない>の3カテゴリーが抽出された。

表3 インタビュー内容から抽出された達成感を示すカテゴリーとそれを構成する主な回答

<頑張ったという気持ち>	*各カテゴリーは < >で表示
●自分が頑張ったと思えた	
●やり終えたと感じた	
<困難を乗り越えたという気持ち>	
●困難なことを乗り越えられた	
●つらいことを乗り越えられた	
<満足のいくケアができたという気持ち>	
●患者に満足のいくケアの提供ができた	
<看護をしたいという気持ち>	
●看護をやりたいという気持ちになれた	
<自分の考えの深まりを感じた>	
●実習で関わった人との人間関係から自分の考えが深まったり広がったりした	

自分自身については、〈人間関係をうまく作れるようになった〉〈自分の考えを伝える力がついてきた〉〈自分の考えを客観的に見つめ直す力がついてきた〉〈状況判断ができるようになった〉〈自立的行動がとれるようになった〉〈変化は自覚できない〉の6カテゴリーが抽出された。

カリキュラムについては、〈実習時期や期間は適切だった〉〈実習期間や時期についての要望〉の2カテゴリーが抽出された。

3) 達成感に影響する要因とそれを構成するカテゴリーの構造化 (図1)

人間関係がうまく作れるようになったなどの回答から、自分自身の成長が実習で関わる患者、臨床指導者、教員などとの関係により影響を及ぼしていることが読み取れた。また患者との関わりにおいて、困難があったが乗り越えられたなどの回答から、困難な状況を乗り越えることで自分自身の成長につながっていることが読み取れた。以上のことから実習で関わる人的要因と自分自身とは相互に影響を及ぼしあう関係として構造化した。また人的要因の中で、臨床指導者や教員からの指導・助言・支持的態度、グループメンバーからの

助言が患者との関わりにより影響を及ぼしていることが学生の回答から読み取れた。以上のことから、臨床指導者・教員・グループメンバーとの関わりが患者との関わりに影響するとして構造化した。

IV. 考察

1. 実習での達成感について

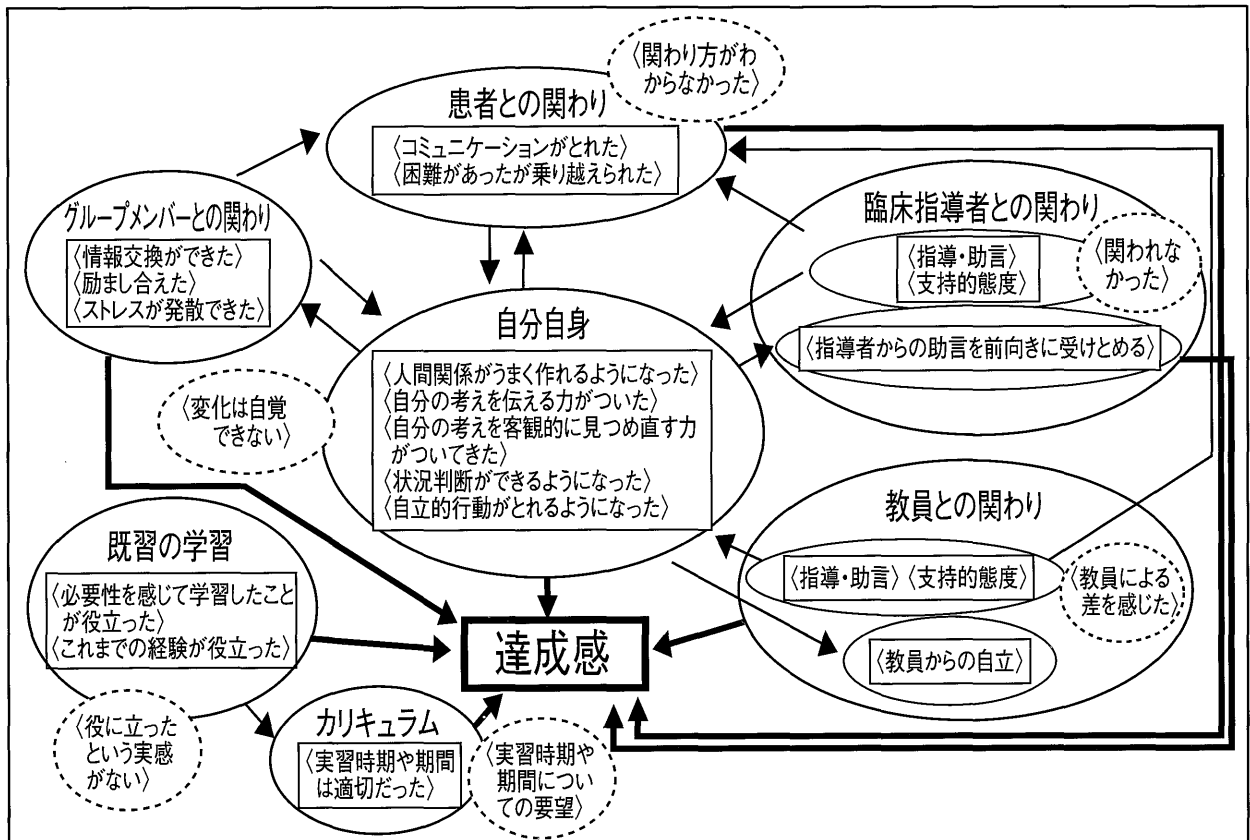
質問紙調査の結果、達成感の平均得点は3.91と比較的高得点であり、前回までの調査結果²⁾³⁾とほぼ同じ結果となった。このことから、実習で得られた達成感、実習の積み重ねによる変化はあまりみられないことがわかった。

またインタビュー内容の分析から、達成感のとらえ方は人によりさまざまであることがわかり、中でも頑張っって困難な状況を乗り越えたという気持ち達成感としてとらえる傾向があることが伺えた。

2. 達成感に影響する要因について

達成感に影響する要因のうち、患者との関わりと自分自身については、インタビューの結果から特に影響した要因としてとりあげられていた。また重回帰分析の結果、患者との関わりについては

図1 達成感に影響する要因とそれを構成するカテゴリーの構造化



*実線で囲んだものは達成感にプラスに影響しているカテゴリー、破線で囲んだものはそれ以外のカテゴリーを示す

表4 インタビュー内容から抽出された達成感に影響した内容を示すカテゴリとそれを構成する主な回答

患者との関わり	グループメンバーとの関わり
<p><コミュニケーションがとれた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ女性として関心をもって関わられた。(母性) ・経験を教えてもらう姿勢で関わられた。(母性) ・患児だけでなく両親ともコミュニケーションがとれた。(小児) ・子育て上の不安を何でも相談してもらえた。(小児) ・患者と共通の趣味があったことが関わるきっかけとなった。(精神) <p><困難があったが乗り越えられた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者が精神的に不安定で声をかけるタイミングも難しかったが、最後にはしてもらい助かったと言われた。(母性) ・母乳の指導ができず落ち込んでしまい、患者のところに行きづらくなったが、それをきっかけに傍にいて関わらなければという気持ちが強かったことに気づき患者との適度な距離が保てるようになった。(母性) ・発達遅滞があり言語的なコミュニケーションが困難だったが関わるうちに見なりのサインがわかるようになった。(小児) ・患者から話をしてくれず悩んだが、教員のアドバイスもあり短時間では話してくれなくても当たり前と思うようにしたら気持ちが楽になった。(精神) ・患者との関わりで自分が見えてくる。自分の対応を直視させられるという意味でショックだが、新鮮で自分の関わりを振り返る機会になった。(精神) <p><関わり方がわからなかった></p> <ul style="list-style-type: none"> ・生れた児に障害があり神経質になっている母親にどう関わればよいかわからなかった。(母性) ・自分だけに話してくれた情報をスタッフに伝えるべきかどうか悩んだ。(小児) ・精神疾患はなぜこのような症状が出ているのか把握しにくかった。(精神) 	<p><情報交換ができた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・わからないことがあれば知識を共有したりカンファレンスで皆で考えていくことで高めあえた。 ・カンファレンスにこだわらずに情報交換ができた。 <p><励まし合えた・助け合えた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習以外でも一緒に勉強しその中でもお互い相談できた。 ・励ましあえた。つらいことがあって話しをしたときに色々な人の意見が聞けた。 ・メンバーが2人だったので不安があったが2人だからこそ助け合って頑張れた。 <p><ストレスが発散できた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生同志でストレス発散できた。 ・話すことで息抜きになった。
臨床指導者との関わり	既習の学習
<p><支持的な態度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者に聞いてくれる姿勢があった。 ・緊張してふるえながら計画を見せたとき私たちにも難しいからといってくれた。スタッフの方から声をかけてくれボイタタッチによって救われた。 ・悩んでいた時期に自分の話を受けとめてくれ、少し後押ししてくれた。 <p><指導・助言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者のところに行きたいが怖くて行けなくなったとき、指導者から何もできなくても患者のことを信じることはできるといわれ、勇気付けられた。 ・初めて行う技術では指導者が丁寧に教えてくれた。 <p><指導者からの助言を前向きに受けとめる></p> <ul style="list-style-type: none"> ・威圧感が大きかった。勉強してきたことはできるだけ伝えるようにした。そうすることで敷しいがよく教えてもらった。 ・注意を受けてもこう直せば良いと思えたので、怖いと感じることはなかった。 ・細かく質問を受けたが、自分が成長しているのが傷つかなかった。 ・これまでの実習で、助言を待っているのではなく、自分から積極的になっていけば経験も広がったのではという体験もあり、もともと自分から関わればよかったと思う。 <p><関わりがもてなかった></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習期間が短かったせいもあり関われなかった。 	<p><実習中に必要性を感じて学習したことが役に立った></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習中に必要性を感じて復習したことが役に立った。今まで学習したことが結びつきの実習。 ・講義の内容は聞いたことがあるという程度であり、実習に行ってから改めて勉強し直した。 <p><これまでの経験が役に立った></p> <ul style="list-style-type: none"> ・洗髪、足浴等基礎で習ったことを応用できた。 ・これまでの人間関係をつくる上での経験(友人関係など)も役に立った。 <p><役立ったという実感が無い></p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習との結びつきは特に感じなかった。ボランティアで子供と遊んだ経験は意識はしていないが役に立っているかも。
教員との関わり	自分自身
<p><支持的な態度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の気持ちを受け止めてくれた。今は休んでいいといわれ救われた。 ・よく声をかけてもらった。 ・教員からケアと一緒にやろうと声をかけてもらい、自分だけなら自信がなくて手が出せなかったことも後押しがあったのでできた。 <p><指導・助言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・無理してベッドサイドに行くのではなくケアを通して自然にはいっていき方法を、一緒にケアをしながら教えてくれた。 ・先生も患者のことをよく把握しており、計画の立案の段階で細かく指導を受けることができよかった。 <p><自立してきた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員不在の時には臨床指導者に相談するなど自立してきた。 <p><教員による差></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員によって差がある。(期限や遅刻などの対応も厳しさが足りないなど) 	<p><人間関係がうまく作れるようになった></p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係がうまく作れるようになった。 <p><自分の考えを伝える力がついてきた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告時にも自分の考えていることを言うようになった。 ・できないこと自身のないことは率直に伝えることができるようになった。 <p><自分の考えを客観的に見つめ直す力がついてきた></p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人の意見を聞いて自分の考えと比較して判断できるようになった。 ・人と比べることで自分の考えも振り返れるようになった。 <p><状況判断ができるようになった></p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告するにも指導者の状況(忙しさなど)を見ながらできるようになった。 <p><自立的行動がとれるようになった></p> <ul style="list-style-type: none"> ・わからないことは自主的に調べるようになった。 ・教員を介さなくても頑張れるようになった。 <p><変化は自覚できない></p> <ul style="list-style-type: none"> ・成長した点は実感できない。 ・コミュニケーションが苦手な気持ちは変わらない。
カリキュラム	カリキュラム
	<p><実習時期や期間が適切だった></p> <ul style="list-style-type: none"> ・時期は適切だった。 ・2週間の実習期間は適切だった。2週間連続だったが、その方が患者の把握しやすかった。 <p><実習時期や期間についての要望></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年後期に実習がないことで臨床から半年近く離れるので就職時の不安がある。 ・受け持ち患者は1週間の病棟実習では介入が難しい問題を抱えていた。(小児、母性) ・最後は疲れていた。新しい施設は慣れるだけで大変、慣れた頃に終るという感じ。

*各カテゴリは < > で表示

達成感と関連の強い要因であったことから、患者との関わりと自分自身を中心に考察する。

1) 患者との関わりについて

影響得点の平均は4.24であり、7つの影響要因の中で最も高得点であったことから、患者との関わりは達成感を高める要因になっていると推測される。さらに重回帰分析を行った結果、患者との関わりのみ達成感との関連が認められた。このことから、患者との関わりは7つの要因の中でも達成感に特に影響している要因といえる。

インタビュー内容から抽出された3つのカテゴリーは、いずれも患者とのコミュニケーションに焦点が当たっており、＜コミュニケーションがとれた＞というプラスの経験だけでなく＜困難があったが乗り越えられた＞という経験が達成感に結びついていた。患者との関わりにおいて困難を感じるのは、学生が患者の抱えている問題現象に直面し何とかしたいという気持ちの現れである⁵⁾と考える。カテゴリーを構成する主な意見をみると(表4)、患者との関わりの中で困難な状況に直面した際、患者と少し距離を置いて自分の関わりを見つめ直したり、ケアの提供を通して信頼関係を築くよう努力しており、このように自分自身の努力で困難と感じた状況を乗り越えた経験が達成感につながっていると考えられる。

患者との関わりにおいて印象に残ったことの中には、各実習で特徴的な点もいくつかみられた(表4)。母性看護学実習においては、同じ女性として関心を持って関わること、妊娠や出産経験を教えてもらう姿勢で関わることにより良い関係が築けていることがわかる。またある学生は、うまく授乳指導ができなかったことで患者との信頼関係がなくなってしまうと感じ、患者のところに引きづらくなったという経験をしていた。その際、臨床指導者が学生の気持ちを聴いてくれ、患者の気持ちも確認してくれたことがきっかけで、これまでよりも楽な気持ちで患者と関わるできるようになった。また、切迫早産など精神的に不安定な状態の妊婦と関わった学生は、患者との関わり方に困難を感じていたが、臨床指導者や教員からのサポートにより乗り越えていた。このように、患者との関わりにおける困難を乗り越えるには自分自身の努力に加えて指導者の適切なサポートを必要としていた。

小児看護学実習においては、患児との関わりはもちろんであるが両親との関わり的重要性についても学んでいた。特に障害を持った患児への関わりを通して、言葉で訴えることのできない患児の反応をとらえることの難しさ⁶⁾や、離婚後母親が1人で養育しているなど家族の抱える問題、抱き方ひとつについても児に合った特別な援助を提供することの難しさなど短期間の実習で多くの学びをしていた。一方で母親が学生に打ち明けてくれた育児上の問題を秘密とすべきか、問題解決のため指導者に話したほうがよいのか、倫理的にどう行動すべきか悩んだという意見もあり、このような状況では指導者のサポートを必要としていると考えられる。

精神看護学実習においては、患者とのコミュニケーションが良好であったという意見とコミュニケーションに悩んだという意見とに分かれた。社会復帰に向けた活動に参加している患者を受け持った学生は、さまざまな活動を通して患者と関わることで患者との連帯感が生れ、コミュニケーションにもよい効果をもたらしていた⁷⁾。またある学生は、患者が示すストレートな反応は自分の対応を直視させられるという意味でショックだが、自分の関わりを振り返る機会になったと答えている。このように、患者と向き合うことはとてもつらい経験であるが、教員や指導者の支持的な関わりによって、身構えすぎたり、入り込みすぎたりしていたことに気づくなど、多くの学びをすることがわかった。

以上のことから学生が困難を乗り越え円滑に実習を進めていくためには、自分自身の努力に加えて、教員や看護師などの他者に支援を求めたり、他者からの支援を受け入れたりすることが重要となる⁵⁾。支援を求めたり受け入れたりすることのできる能力も実習を積み重ねることにより身につけてくるものであると考える。

2) 自分自身について

影響得点の平均は3.66であり、7つの影響要因の中では4番目の得点であった。また重回帰分析を行った結果、第1報²⁾と第2報³⁾では達成感との強い関連を認めたが、今回については達成感との強い関連は認められなかった。しかしインタビューの結果では、特に影響した要因の1つとしてとりあげられていた。

達成感に影響する要因を構造化してみると、患者との関わりをはじめとした実習で関わる人的要因と自分自身とは相互に影響を及ぼしあう関係にあった。つまり、人的要因が自分自身に影響を及ぼすだけでなく、自分自身の成長が人的要因に影響を及ぼしていた。この結果から、自分自身の努力や成長は達成感に影響を与える重要な要因と考える。

インタビュー内容から抽出された6つのカテゴリーのうち、自分自身の成長を示すカテゴリーが5項目抽出され、その内訳は<人間関係をうまく作れるようになった><自分の考えを伝える力がついてきた><自分の考えを客観的に見つめ直す力がついてきた><状況判断ができるようになった><自立的行動がとれるようになった>であった。

主な回答(表4)からは、臨床でのスタッフの動きを察知しながら、適切なタイミングで連絡や相談などの行動がとれるようになるなど、経験の中でしか身につけられない状況判断能力が備わってきていることが伺えた。また、周囲からの助言を取り入れながら自分の行動を振り返る余裕が持てるようになってきたことがわかった。基礎看護学実習の段階では、他者の意見を聞いたり他の学生の受け持ち患者に関心を持つ余裕もなかったが、次第に、他者の意見を聞いて自分にはないものを吸収したり、自分ならこう考えるなど自分の考えと比較して判断できるようになったという意見もあった。また最初は臨床指導者の助言を厳しいと感じ、否定的に受け止めることも多かったが、自分の方から勉強してきたことを積極的に伝えたり自分の考えをできるだけ伝えるよう努力するなど自分の関わり方が変わってきたためか、臨床指導者の助言も前向きに受けとめ生かせるようになったという意見もあった。

病院という場では、学生の実習目標達成よりも治療・看護が優先されるため、学生が学習や看護の機会を積極的に獲得し学習を進めることが実習目標達成にとって重要である⁵⁾。学生が学習の機会を逃さず生かそうとする姿勢は実習経験の積み重ねにより身につけてきたものといえる。

さらに、教員を介さなくても頑張れるようになったなど自立的行動がとれるようになったのも実習の積み重ねの成果であると考えられる。基礎看護学

実習の段階では何もかもが不安で、わからないことが何なのかもわからない状態だったので、学習の進め方1つでも何をどのように調べたらよいかといったヒントを教員に求めていたが、次第に学習の要領がつかめ、自分で解決することができるようになったという意見もあった。つまりわからないことやできないことにどう対処し解決したらよいかという問題解決能力を身に付けてきていることが伺えた。以上のような自分自身の成長が達成感につながっていると考える。

一方で<変化は自覚できない>というカテゴリーも抽出された。成長したという実感がもてなかった、苦手なことを克服できなかったなどの意見が含まれていた。そのような場合、客観的に学生の成長した点を評価し自信につながるような教員の働きかけも必要と考える。つまり学生の状況を形成的に評価しその結果を適切にフィードバックする⁸⁾⁹⁾ことにより、学生は自分自身の成長や課題を明確化することができると思う。

3) その他の要因

臨床指導者との関わりについては、影響得点の平均は3.61であり、7つの影響要因の中では5番目であった。しかしインタビュー内容から抽出されたカテゴリーをみると、<関わりがもてなかった>を除いて達成感を高める内容であった。<支持的な態度><指導・助言>については、指導者に聞いてくれる姿勢があった、患者との関わりで悩んでいたら、私たちにも難しいからとってくれた、指導者の方から声をかけてくれボディタッチによって救われた等、臨床指導者から必要なときにサポートしてもらえた経験をしている。このことから、学生が患者との関係での戸惑いや悩みを乗り越える上で臨床指導者の関わりが大きく影響していることが伺えた。<指導者からの助言を前向きに受け止める>では、助言を待っているのではなく、自分の方から積極的になっていれば経験も広がったのではないかと感じている学生もおり、学生の実習に臨む姿勢の変化が、臨床指導者との関わりにより影響をもたらしていると考えられる。

教員との関わりについては、影響得点の平均は4.09であり、7つの影響要因の中では3番目に高い得点であった。インタビュー内容から抽出された4つのカテゴリーのうち<支持的な態度><指導・助言>については、ケアを通して自然に患者に関わ

る方法を一緒にケアをしながら教えてくれたり、教員の方からケアを一緒にやろうと声をかけてもらう等、自分だけではできなかったことでも教員の後押しがあったのでできたという経験を持っており、困っているときに教員が患者のケアと一緒に入ってくれたことが達成感を高める要因となっていることが伺えた。〈自立してきた〉では、教員に全てを聞かなくてもできるようになった等の意見もあり、実習が進むにつれて学生自身で解決できる部分が大きくなっていることが伺えた。その一方で、困難な状況においては教員の〈支持的な態度〉や〈指導・助言〉を必要としていることがわかった。教員が危機を体験している学生のさまざまな感情を共感・受容することにより、学生の側に自分を見直す機会が生れてくる⁹⁾¹⁰⁾。つまり、学生心情の受容と共感は困難な状況を経験している場合特に必要な教授活動と考える。

グループメンバーとの関わりについては、影響得点の平均は4.17であり、7つの影響要因の中では2番目に高い得点であった。さらにインタビュー内容から抽出された3つのカテゴリーはいずれも達成感を高めることにつながる内容であり、影響得点の結果とも併せて考えるとよい影響をもたらしていることが推測された。

既習の学習については、影響得点の平均は3.54であり、7つの影響要因の中では6番目であった。しかしインタビュー内容から抽出されたカテゴリーをみると、2つのカテゴリーで役立つことを示す内容が含まれていた。〈実習中に必要性を感じて学習したことが役立つ〉については、実習中に必要性を感じて復習したことが役に立った、習った症状と実際の患者さんの様子とが実習で結びついた、実習中は知りたいと思って復習できた等、今まで学習したことが結びつくのが実習であり、そのためには実習中に必要性を感じて学習することが重要となると感じていることが伺えた。〈これまでの経験が役立つ〉については、演習で習ったことが役に立った、洗髪・足浴等基礎看護学で習ったことを応用できた、今まで人間関係をつくる上での経験(友人関係など)も役に立った等、これまでの学習や経験が役立つと感じていることが伺えた。その反面〈役立つ〉という実感がなく、〈役に立たない〉というカテゴリーも抽出された。実習ではこれまでの学習の活用にとどまらず新たに学習

することも多いため、これまでの経験や学習は意識されにくい面があるためではないかと考える。

カリキュラムについては、影響得点の平均は3.06であり、7つの影響要因の中では最も低い結果となった。インタビュー内容から抽出されたカテゴリーから、実習時期や期間についての現状評価と課題について検討する。まず実習時期については、4年前期で終わるのは適切という意見と4年後期に実習がないことで臨床から半年近く離れるので就職時の不安があるという意見とがあり、学生の選択で後期の実習ができるようなカリキュラムの導入も課題といえる。次に実習期間については、2週間の実習期間は適切だったという意見と、短かったという意見とがあり、学生の実習での課題達成の状況が影響していると考えられる。つまり残された課題の程度によって違いが出たのではないかと考える。特に受け持ち患者の抱えている問題によっては限られた期間の実習では介入が難しかったという意見もあり、限られた期間の中で何に重点を置いて実習をすすめるかも課題である。

V. 結論

重回帰分析の結果、達成感に影響する7つの要因のうち患者との関わりにおいて達成感との強い関連が認められた。さらにインタビューの結果から、患者との関わりと自分自身の2つの要因が、達成感に特に影響する要因としてあがった。

患者との関わりにおいては、困難と感じた状況を乗り越えた経験が達成感につながっている。そして困難を乗り越えるためには、自分自身の努力に加えて教員や看護師などの他者に支援を求めたり他者からの支援を受け入れたりすることが重要であり、その能力は実習を積み重ねることにより身についてくるものである。

自分自身においては、自分自身の努力や成長が達成感につながっている。中でも状況判断の能力や問題解決能力が身についてくることにより自立した行動がとれるようになっている。その一方で困難な状況においては教員や臨床指導者の支持的な態度や指導・助言を必要としていることがわかった。

文献

- 1) 舟島なをみ：看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題、*Quality Nursing*7(3)、6-14、2001
- 2) 原田秀子：臨地実習における学生の達成感に影響する要因の検討、山口県立大学看護学部紀要第8号、93-98、2004
- 3) 原田秀子、張替直美、中谷信江、高野静香：臨地実習における学生の達成感に影響する要因の検討（第2報）、山口県立大学看護学部紀要第9号、49-56、2005
- 4) 原田慶子、阿部明美：学生の達成感・満足感から基礎看護学実習を考察する(第3報)ー達成感・満足感への影響要因よりー日本看護学教育学会誌9(2)、74、1999
- 5) 山下暢子、貞廣和香子、舟島なをみ：看護学実習における学生行動の概念化、看護教育学研究、12(1)、15-28、2003
- 6) 関美知代、菅谷千恵子、宮口恵美子、山本郁子、山下容子、小口多美子：小児看護学実習において学生が直面する困惑への対処方法、日本看護学会論文集第34回小児看護、56-58、2003
- 7) 松井諭、角基代子、杉角俊信、杉本博子、藤多志子、長井麻紀江、松田静子、松田久美子：精神看護学実習における学生の不安軽減の要因と変化、日本看護学会論文集第33回看護教育、120-122、2002
- 8) 松田安弘、中山登志子、舟島なをみ、横山京子、鈴木恵子、本郷久美子、小川妙子：看護学実習の目標達成に必要な教授活動の解明ー質的研究3件のメタ統合を通してー、看護教育学研究、14(1)、51-64、2005
- 9) 舟島なをみ：看護教育学研究 発見・創造・証明の過程、医学書院、2002
- 10) 廣田登志子、舟島なをみ、杉森みど里：実習目標達成にむけた教員の行動に関する研究ー看護学実習における学生との相互行為場面に焦点を当ててー、看護教育学研究、10(1)、1-14、2001

Title : A study of factors affecting the students' sense of accomplishment in nursing clinical practicum (the third report)ーthrough longitudinal section investigation for a for a fourth graderー

Author : Hideko Harada

*School of Nursing, Yamaguchi Prefectural University

Key words : sense of accomplishment, influential factors, experience, clinical supervision